瞬間プロトタイプ命題理論

田林　洋一

In this thesis, the Semantic Hierarchy created by Nakau (1994) and the Division of Pragmatic Labor by Horn (1984) are reviewed and conbined from the cognitive perspective. The author critically examines the principles of Horn and proposes the Instant Prototype Theory as an alternative plan. By using this method, the faults of the Divison of Pragmatic Labor and the problems of markedness can be resolved and explained. Also, by applying this theory, the author proposes an explanation for the Spanish negation of the preposition EN and the other linguistic phenomenon of negation in Japanese. As we consider the existence of the protoype in all propositions, the linguistic phenomenon we think of marginally can be verified centrally.

1. はじめに

本稿ではスペイン語前置詞ENの機能ならびに周辺的と目されてきた言語現象に説明を与える事を目的とする。先行研究を融合することにより、新たな言語理論構築を試みる。まず、階層意味論における中核命題をその命題におけるプロトタイプと仮定する。中右（1994）においては中核命題がプロトタイプ的である、という主張はみられない。第一の理由は、階層意味論があくまでも生成文法を下敷きにした意味論的理論の構築であり、プロトタイプを考慮する余地がなかった点にある。二点目は、階層意味論内における言語現象において、プロトタイプ自体を考慮に入れる必要性がなかったことにある。また、Horn（1984）におけるR-推論（R-inference）をかけた解釈（E-expression）によって導き出されたステレオタイプ（Stereotype/salient）をも同時にプロトタイプ的と解釈する。このようにプロトタイプの概念を導入することにより、周辺的と目されてきた（あるいはHornにおいては有標的と目されてきたものの、有標性の逆転が見られるという矛盾のある）言語現象の説明を試みる。

2. プロトタイプ命題

Horn(1984)の語用論的分業（the Division of Pragmatic Labor）は、有標性の逆転、あるいは有標と無標の区別が曖昧であった事が最大の欠点であった。しかし、R-推論（R-inference）によって生じたステレオタイプ

(Stereotype) をその命題のプロトタイプと仮定すれば、ある程度の解決が得られる。以下は『有標性の逆転』を引き起こしたHornの例文である。

(1-1) Black Bart killed the sheriff.
(1-2) Black Bart caused the sheriff to die.

Horn (1984：402)

(1-1) と (1-2) は表現方法こそ異なるが、指し示している真理値は同一であると仮定する。すると、この場合におけるプロトタイプ命題は (2) である。

(2) [ϕ] [POL [ϕ [BLACK BART KILL SHERIFF]]]

本稿では中右 (1994) に従い、POLは極性 (Polarity)、POSは肯定(Positive)、NEGは否定(Negative)をそれぞれ表す。(2) は、『如何なる理由であれ保安官は死亡しているか否か分からないがその場にいて、そしてなおかつ、その原因となっているのはどんな方法を用いたにせよ、ブラック·バート』を表す。(2) においてテンスやアスペクトは決定されていない。しかし、(1-1) 及び (1-2) の話者は状況を全て踏まえて過去時制の活用を用いている。そこで、『過去』の出来事に話を限定したという点で、プロトタイプから逸脱する形を取る。保安官が死んだのは、話者が選択したテンスが示すように過去である。従って、(2) のプロトタイプ命題は家族的類似性がテンスにおいては『過去・現在・未来』といった (あるいはそれ以上の) 共通する家族的類似性から外れる。即ちプロトタイプから逸脱した形を取って『過去』という家族的類似性を一つに限定した形を取り、以下のような意味構造を生成する。

(3) [IT WAS THE CASE] [POL [BLACK BART KILL SHERIFF]]

(3) は『如何なる理由であれ保安官は死亡しているか否かにせよその場にいて、そしてなおかつ、その原因となっているのはどんな方法を用いたにせよ、ブラック·バートであった』ということを表す。更に、保安官の生存状態は (1-1) の文であれ、(1-2) の文であれ、既に死亡している。従って (3) の命題は以下のように派生する事ができる。

(4) [IT WAS THE CASE] [POS [BLACK BART KILL SHERIFF]]

つまり、(3) の命題からもう一歩進んだ、即ちプロトタイプから更に一

歩逸脱した文章表現となる。しかし、この極性の決定は仮に否定だからと言って必ずしも有標性を含意しない。肯定であれ否定であれ、プロトタイプ命題からから少し離れて派生された新たなる命題内容である。

(4) においてブラック·バートが能動的かつ自主的に何らかの行動を保安官に直接与えて保安官が死んだのならば、(4) から更に放射状カテゴリー命題に派生する必要はない。しかし、保安官の心臓が弱いという情報を握っていて、その心臓発作を狙うためにブラック·バートが何らかの行動を起こしたというような (Horn 1984：401-402) 受動的、偶発的かつ不能犯的命題ならば、(4) は以下の命題に派生される。

(5) [IT WAS THE CASE] [POS [BLACK BART CAUSE SHERIFF TO DIE]]

(4) と (5) は、その有標性及び語用論的容認性という点では異なる。しかし、(5) は (4) で話者が述べたがっていた命題からまた一歩派生された形を取っている。そして、ある命題は派生を重ねるごとにそのプロトタイプから遠ざかる。従って、有標性の程度が違うという事は、プロトタイプからどの段階まで逸脱しているという事と同一である。この派生の順序は階層意味論のそれと同様であるが、本稿の新しい試みは派生の順序が段階性ではなく、放射状カテゴリーを形成しているという点である。つまり、有標性は程度問題であり、階層構造を成す事が出来ないと仮定している。

この点について極性表現における説明が適当であろう。以下の例文を検討する。

(6) ブラック·バートは保安官を殺していないわけではない

(6) は、極性に関して『純粋な肯定命題』よりも更にプロトタイプから外れた命題内容を指し示している。何故なら、それは以下のような順序で意味構造を形成していくからである。

<1> [ϕ] [POL [ϕ [BLACK BART KILL SHERIFF]]]

↓

<2> [IT WAS THE CASE] [POL [BLACK BART KILL SHERIFF]]

↓

<3> [IT WAS THE CASE] [NEG [BLACK BART KILL SHERIFF]]

↓

<4> [IT WAS NOT THE CASE] [NEG [BLACK BART KILL SHERIFF]]

（6）は放射状カテゴリーに照らし合わせて派生された意味構造の段階が『純粋な肯定命題』である（1-1）よりも一段階多い。従って、（6）は（1-1）に比べプロトタイプ命題から外れたより有標的な文である。

有標性が段階性を有しないのは、コンテクスト次第では（6）のような二重否定の方がより無標的であると考えられるからである。つまり、（6）という文章表現の方が話者にとってはプロトタイプ的という状況も存在するからである。例えば、（6）は、ブラック·バートが保安官を殺したのは確実だが確たる証拠がない場合や、ブラック·バートの殺害をほのめかせば自分がブラック·バートに殺されてしまうため口に出すのも憚られる、といった状況においての発話である可能性もある。こうしたコンテクストの場合、プロトタイプは＋αの状況を受けて、以下のように変わる。

（7）［φ］［POL［+NEG［BLACK BART KILL SHERIFF]]]

このプロトタイプ命題がどのように派生されていくか、以下に示す。

<1>［φ］［POL［+NEG［BLACK BART KILL SHERIFF]]]＝（7）
↓
<2>［IT WAS THE CASE］［POL［+NEG［BLACK BART KILL SHERIFF]]]
↓
<3>［IT WAS THE CASE］［NEG［+NEG［BLACK BART KILL SHERIFF]]]

以上のように、（7）と（5）の違いは有標性の程度ではなく、プロトタイプ命題が異なるという点である。何故なら、有標性の程度は（7）と（5）では同じレベルの放射状カテゴリー内に位置するからである。従って、（6）と（1-1）ではプロトタイプ命題が状況によって異なる。即ちプロトタイプ命題がどのように決定されるかは瞬間的なものであり、その場の状況から話者の心的態度に到るまで全てプロトタイプ命題を変化させる力を有している。

有標性はまた、極性には完全に肯定的な『断言』とする強い肯定や、二重否定のみならず三重否定、四重否定の存在によって、段階性を認めることが出来ない。つまり、三重否定の方が二重否定よりも有標的である、と断言できない。なぜなら有標性とは『コンテクストに依存するプロトタイプにどれだけ近いか』が指標になっているからである。

（7）における［+NEG］はコンテクストに依存された否定である。コンテクスト依存は必ずしも極性だけではない。テンスやアスペクト、モダリティなど全てが＋αになる条件を孕んでいる。そして、＋αを含まないプロトタイプ命題はないと思われる。この点ではパロールと似たような扱

いになる。

コンテクストに依存されたプロトタイプ命題によるものとそうでないものの違いは極性のみならず、全ての意味領域をカバーしうる。それは、ある言語表現が全く同じ場合でも違った意味を持ちうるという点をも同時に説明しうる。

(8) Frankly speaking, I don't think that he is a nice person.

(8) のコンテクストに依存されないプロトタイプ命題は以下のようになる。

(9) [ϕ] [POL [ϕ [HE BE A NICE PERSON]]]

(9) はテンス及びアスペクトの影響を受けて、以下のような放射状カテゴリー命題を形成する。

(10) [IT IS THE CASE] [POL [HE BE A NICE PERSON]]

更に極性の影響を受け、新たに放射状カテゴリーを形成する。

(11) [IT IS THE CASE] [POS [HE BE A NICE PERSON]]

(1-1) と違うところは、(8) の文では談話モダリティ (D-MOD) と文内モダリティ (S-MOD) を明確にすることが必要であるという点である。従って、以下のように派生される。

(12) [POL [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS [HE BE A NICE PERSON]]

ここで文内モダリティ (S-MOD) の中の極性を明確にする必要があるという点で、もう一段階放射状カテゴリーを増やす必要がある。

(13) [NEG [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS [HE BE A NICE PERSON]]

更に談話モダリティ (D-MOD) に依る派生によって生じた放射状カテゴリーが形成され、ようやく (8) の意味構造が生成される事になる。

(14) [FRANKLY SPEAKING] [NEG [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS [HE BE A NICE PERSON]]

しかしコンテクストに依存するプロトタイプ命題という定義上、率直に話すのが当たり前である場面における（8）のプロトタイプ命題は（15）である。同じ発話であるにもかかわらず、そのプロトタイプ命題は談話モダリティ（D-MOD）が＋αとして組み込まれているという点で、プロトタイプ命題は（9）とは異なる。

（15）［φ］［POL［+FRANKLY SPEAKING［HE BE A NICE PERSON]]]

そしてこのプロトタイプ命題は以下の過程で（8）になる。但し（14）のそれと全く同義ではない。最終的に派生された放射状カテゴリー命題と（14）の意味構造を比較すれば、その違いが見て取れる。

<1>［φ］［POL［+FRANKLY SPEAKING［HE BE A NICE PERSON]]］＝（15）

↓

<2>［IT IS THE CASE］［POL［+FRANKLY SPEAKING［HE BE A NICE PERSON]]]

↓

<3>［IT IS THE CASE］［POS［+FRANKLY SPEAKING［HE BE A NICE PERSON]]]

↓

<4>［POL［I THINK]］［IT IS THE CASE］［POS［+FRANKLY SPEAKING［HE BE A NICE PERSON]]]

↓

<5>［NEG［I THINK］［IT IS THE CASE］［POS［+FRANKLY SPEAKING［HE BE A NICE PERSON]]]

この意味構造の違いが、同じ発話がされたにもかかわらず、その意味は同じではないという事の根拠であろう。

更に、（15）から派生された意味構造<5>において、以下のような文は生成されない。

（16）*Not frankly speaking I think he is a nice person.

本稿ではプロトタイプ命題が文脈及び連想によってプロトタイプから逸脱し意味を派生していく視点に立っている。しかし、プロトタイプがコンテクストによって付け加えられた＋αには直接的に影響を及ぼす事はない。従って、コンテクスト依存の＋αには以下のような定式が与えられる。

『コンテクスト依存の＋αそれ自体は意味論的に如何なる影響も受けず、自律的である』

さて、先に延べた容認可能性はそのまま有標性の程度に結びつく。プロトタイプ命題における＋αがあるか、もともとプロトタイプ命題が異なるかでその意味構造が変わる。

(17) [ϕ] [POL [ϕ [BLACK BART CAUSE SHERIFF TO DIE]]]

(17) は (1-2) のプロトタイプ命題である。しかし同時に、(2) も (1-2) のプロトタイプになりうる。従って、ある同一の言語表現は異なるプロトタイプを同時に持ちうる。このプロトタイプが決定されるのは、純粋にコンテクストによって依存されているため、プロトタイプが (2) であるか (17) であるかはその瞬間毎に異なることになる。

3. 連想と放射状カテゴリー命題

この節では、容認可能性と有標性の程度の変化はプロトタイプから逸脱され、放射状カテゴリー命題を形成していく過程で『連想』に起因することを検証する。そして、その連想が言語処理に対して負荷が大きければ大きいほどプロトタイプから逸脱した『より有標的な』言語表現となって出現する[1]。この負荷の大きさのため、言語処理をする過程も長くかかる。その結果、解釈に時間がかかるか、解釈が困難になりうる。

(1-2) の発話をした話者のプロトタイプが (17) ではなく (2) であったと仮定すると、言語表現の意味構造は前述のように (18) になる。

(18) [IT WAS THE CASE] [POS [BLACK BART KILL SHERIFF]] = (4)

(18) の意味構造を考えていた話者が (1-2) の発話を発するには、プロトタイプ命題に以下のような連想が働かなければならない。即ち、『ブラック·バートは保安官を殺した』→『如何なる理由であれ、保安官の死亡原因はブラック·バートによるものである』→『従って、ブラック·バートは保安官の死亡の原因である』

ここで、(1-1) の発話は (18) の意味構造から (19) の意味構造に到達する。

(19) [IT WAS THE CASE] [POS [BLACK BART CAUSE SHERIFF TO DIE]] = (5)

だが、もしコンテクストが不能犯の可能性を考慮に入れているような状

況であったら、瞬間的にプロトタイプ命題は（17）に変化する。よって、（17）から（19）の意味構造を導き出すのは、（2）から（19）の意味構造を引き出すよりもかかる処理が少ない。また、連想によるプロトタイプ命題からの派生も必要ではない。

因みに、連想よりもプロトタイプ命題が決定されるのが先である。何故なら、プロトタイプ命題はその場のコンテクスト、話者の心的態度、状況、その他諸々の話者及び聞き手に対する全ての要素が絡み合って瞬間的に決定されるからである。プロトタイプが瞬間的に決定されたからこそ、そこから派生された発話には有標性の程度が生じる。これは言語表現が有標性を持つ事実とも一致する。もし連想が先に立つならば、プロトタイプ命題自体が瞬間的なものであるため、言語表現に有標性の区別が生じなくなる。

連想による命題の派生は文を過剰生成してしまう可能性があり、それを限定する何らかの要因が必要である。以下の発話における意味構造の生成を検討する。

（20）The soldier was dying .

（20）のプロトタイプ命題及び派生による放射状カテゴリー命題の意味構造は以下の通りである。

（21-1）［ϕ］［POL［ϕ［SOLDIER BE DYING]]]
（21-2）［IT WAS THE CASE］［POS［SOLDIER BE DYING]]

（20）の意味は『兵士が死にかけていた』であり、『兵士がもう既に死んでしまっている』訳ではない。従って、以下のような連想による意味構造を生成して、それを解釈とするわけにはいかない。

連想：『兵士が死にかけていた』→『死ぬのは時間の問題である』→
『したがって、兵士は既に死んでいる』

（21-3）#［IT WAS THE CASE］［POS［SOLDIER BE DEAD]]

（20）の文から（21-3）の意味構造を想定することは出来ない。こうした過剰生成による意味構造の非解釈的事態を回避するために、連想に以下の公式を付け加える。

『言語表現における連想は、その命題内容の真理値を変えない範囲でしか行えない』

逆に言えば、真理値を変えない限り、如何なる連想も可能である。しかし、あまりに突飛な連想はそもそも人間の精神活動の上で行われるはずもなく、また仮にそうして構築された言語表現は余りにプロトタイプから逸

脱し過ぎ、有標的であり過ぎるために『容認不可能』『非文法的』と解釈されかねない。容認不可能な文と非文法性の境界線の不透明性や容認不確実性は、この連想が話者の精神構造に許容されるかどうかに依存する。

4. プロトタイプ命題と連想

この節では認知言語学的観点も基本的には瞬間プロトタイプ命題理論における自由連想及びメタファーに還元されうる事を見る。

Lakoff and Johnson (1980) におけるメタファーの理論はメタファーがどこから来るのか、という回答には言及していない。本稿ではメタファー、自由連想の概念はプロトタイプを作り出すと個々の生得的認知領域にあると考える。

(22-1) The man that the woman that the stranger called chased jumped into the river.
(22-2) The ring that the robber that the policeman chased stole cost 1 million dollars.

これも認知処理の経済性から (22-2) が (22-1) より早く状況を把握できる。心理言語学的観点から見ても連想の影響力は (22-1)、(22-2) の例文が証明している[2]。

ここで『周辺的言語現象』も、瞬間プロトタイプ命題理論での解決を試みる。

(23) この部屋はぞっとしない。

(23) の発話は、実際の意味は『ぞっとする』、即ち、何かに怖がっている際に発せられる。つまり、否定の形を取るのに肯定の意味に捉えられる文である。

まず、(23) のプロトタイプ命題は、以下のように予想される。

(24) [ϕ] [POL [ϕ [ROOM BE FEARFUL]]]

しかしここでは、話者が聞き手に対して、自分が怖がっていることを知られたくないというコンテクストが存在する。従って、(23) の真のプロトタイプは (25) である。

(25) [ϕ] [POL [+NEG [ROOM BE FEARFUL]]]

(23) の発話においては否定語が一語しかないが、実際には否定素性を

プロトタイプ命題が持っていると解釈されうる。否定素性は時として有形の形を持たない。『ぞっとしない』表現は有形の形を持たない表現方法であろう。従って、プロトタイプ命題に極性素性の［＋NEG］が付随する。

（23）は現在時制を取っていること、極性は否定形であることなどから、（25）から派生されて（26）の意味構造を持つ。

（26）［IT IS THE CASE］［NEG［＋NEG［ROOM BE FEARFUL］］］

（26）の意味構造により、（23）は『ぞっとしなくない』という二重否定の形を取っていることが分かる。

もう一つ、日本語による例文を示す。ある学生Aが友人の学生Bに某日、『明日の五限は数学だよね』と尋ね、Bが『そうだよ』と答えたとする。翌日の朝、まだ授業が始まる前に時間割を見ていたBが、実は五限は化学であると知った時、Bは慌ててAにその旨を（五限は数学ではなくて化学だということを）『授業が始まる前に』伝えたとする。その時の発話は(27)である。

（27）五限は化学だった。

授業が行なわれるのは未来のことだが過去時制が現われている。しかし、コンテクストによると過去の発話を訂正するという意味合いが強いために、（27）は過去を言及するプロトタイプ命題を持つ。従って、（27）のプロトタイプ命題は（28）である。

（28）［ϕ］［POL［+PAST［FIFTH CLASS BE CHEMISTRY］］］

このプロトタイプ命題が派生を繰り返し、最終的に以下の意味構造を生成する。

（29）［IT IS THE CASE］［POS［+PAST［FIFTH CLASS BE CHEMISTRY］］］

従って、未来における事象が過去の時制で表現されるのは、プロトタイプ命題において既に修正がかけられているからである。『その一瞬においては』過去時制を含んだものがそのままプロトタイプ命題となる。

5. ゲシュタルト知覚及び話題化

ゲシュタルト知覚の連想についても、本稿の方法で図と地の関係とそれに伴う話題化を説明する。

(30-1) He invited me to the party.
(30-2) I was invited to the party by him.

両者とも真理値は同じであるが、その意味するところは異なる。(30-2) においては『I』が図として際立っている。まず、(30-1) のプロトタイプ命題は (31-1) のようになる。

(31-1) [ϕ] [POL [ϕ [HE INVITE ME TO THE PARTY]]]

これにテンスその他の要素を付け加えると、(30-1) の意味構造は (32-1) になる。

(32-1) [IT WAS THE CASE] [POS [HE INVITE ME TO THE PARTY]]

しかし、(30-2) におけるプロトタイプ命題は (30-1) とは異なる。なぜなら図の際立ちは話題化と同じような意味構造を持つからである。(30-2) において、『I』は話題化され、図となって際立っているため、プロトタイプ命題は (31-2) になる。

(31-2) [ϕ] [POL [ϕ [I BE INVITED TO THE PARTY BY HIM]]]

(31-2) は (30-2) が無標である時の状況におけるプロトタイプ命題である。(31-2) は派生を繰り返して (32-2) の意味構造を取る。

(32-2) [IT WAS THE CASE] [POS [I BE INVITED TO THE PARTY BY HIM]]

(31-1) のプロトタイプ命題を持つ (30-2) は、(30-1) に比べると遥かに有標的である。なぜなら (30-2) が発話されるには以下の連想が必要だからである。

連想：『彼は私をパーティに招待した』→『従って、私はパーティに招待された』。

これにより (32-1) は (32-2) を取りうる。即ち、連想を働かせている分だけプロトタイプ命題から逸脱した有標性の高い放射状カテゴリー命題として現われてくる。

話題化は『既にある命題について既知である』という言語情報がプロトタイプ命題に組み込まれて派生されていく。

(33-1) I like the baby.
(33-2) The baby, I like.

(33-1) におけるプロトタイプ命題とその派生された放射状カテゴリー命題に到る過程は前述と同様である。

(34-1) [ϕ] [POL [ϕ [I LIKE BABY]]]
(35-1) [IT IS THE CASE] [POS [I LIKE BABY]]

(33-2) が『私が今babyの事を話題にしているのは周知の事実である』というコンテクストを孕んでいたら、プロトタイプ命題に＋αとなるコンテクストがかかるため、(34-1) とは異なる。

(34-2) [ϕ] [POL [+TOP; BABY [I LIKE BABY]]]

[+TOP] とはプロトタイプ命題において既に話題化されているという事を示す。(34-2) の派生は (35-2) になる。

(35-2) [IT IS THE CASE] [POS [+TOP; BABY [I LIKE BABY]]]

逆に、プロトタイプ命題にコンテクストが影響を受けない場合の (33-2) における発話の意味構造は (35-3) である。

(35-3) [+TOP: BABY] [IT IS THE CASE] [POS [ϕ [I LIKE BABY]]]

認知上の経済性により、顕在化された文では『baby』が一つしか出現しない。それは既に話題化によって意味構造の前面に押し出された『baby』が冗長性を避けるために後に出てくる『baby』を省略したものと考えられる。

以上の考察から、話題化及びゲシュタルト知覚、図と地の概念もまた、瞬間プロトタイプ命題で説明されうる。

6. ENの否定

今までの考察をスペイン語前置詞ENを用いた否定表現に応用する。Bosque (1980：29-64) はENの否定を主題化 (Tematización) 及びNEG-削除 (Elisión de NEG) の観点から説明を与えている。

(36-1) No vino nadie.
(36-2) Nadie vino.

Bosque (1980 : 29)

(36-1) と (36-2) は、強調の意味を (36-2) が含意するという点では異なるが、真理値は同一である。また、否定の呼応 (concordancia negativa) の観点から、(37-1) が非文である事も同様に妥当性を持つ。

(37-1) *No vino alguien.
(37-2) No vino nadie.= (36-1)

Bosque (1980 : 29)

ENを含んだ否定表現に関して以下の例文を参照する。

(38-1) Tal actitud no se puede tolerar en modo alguno.
(38-2) No he estado aquí en mi/la/ vida.
(38-3) No lo he visto en todo el día.

(39-1) En modo alguno se puede tolerar tal actitud.
(39-2) En mi/la/ vida he estado aquí.
(39-3) En todo el día lo he visto.

Bosque (1980 : 34)

(38) と (39) は意味論的真理値は同一であり、それぞれがパラレルな関係となっている。否定の意味を持つのは、前置詞句の移動及びNEG-削除によって表層に現われないという説明がされる。これはチョムスキー付加 (Chomsky-adjunction) 及びNEG-削除によって以下のように定式化されている。

Tematización de TPN (T-TPN)

X−NEG		[V−Y−TPN−W]				−Z
1	2	3	4	5	6	7
1	5+2	3	4	ϕ	6	7

Bosque (1980 : 34)

しかしこの表現方法で+NEGの素性が必ず付加されるとは限らない。(40-1) と (40-2) はともに曖昧である。

(40-1) En mi vida he sido vendedor de libros.
(40-2) En toda la tarde has tenido tiempo de ir a la tienda.
Bosque (1980 : 34)

(40-1) と (40-2) はともに肯定と否定の二通りの解釈が与えられる。
本稿では原則的に、主題化、呼応及びNEG-削除によって、少なくともN-wordを含んだ否定表現は妥当性を持つという主張は支持する。しかし、それには弱点が三つ存在する。
一つ目は、元来全く否定の要素を持ち得ない前置詞『EN』を『Tampoco』、『Nadie』、『Sin』といったN-wordと同系列に扱っている事である。ENを主題化すると何故否定要素が加わるのかといった観点が周辺的扱いになっている。二つ目は、それに伴う意味構造分析の欠如である。統語論的側面を重視し、意味論的側面には手を触れていない。そして最後に、NEG-削除が如何なる理由で成されるのかといった動機付けが明確ではない。
これらに対する回答として、本稿では瞬間プロトタイプ命題理論を使って説明を与える。

(41-1) En tu vida has trabajado mucho.
(41-2) En tu vida has trabajado.

(41-2) ではNEG-削除の理由で顕在化されてはいないものの、否定的解釈がされるが、(41-1) では肯定的解釈をとる。似た統語構造を持つこの二文が、何故 (41-1) が肯定表現を持ち、(41-2) が否定表現を持つのか。まず、(41-1) のプロトタイプ命題は (42-1) のようになる。

(42-1) [ϕ] [POL [ϕ [EN TU VIDA TU TRABAJA MUCHO]]]

(42-1) は以下のような過程を経て (41-1) の意味構造を構築する。

<1> [HA SIDO LA COSA] [POL [EN TU VIDA TU TRABAJA MUCHO]]
↓
<2> [HA SIDO LA COSA] [POS [EN TU VIDA TU TRABAJA MUCHO]]

(41-2) は、やはり (42-2) のプロトタイプ命題から放射状カテゴリー命題を派生するが、若干の説明が必要となる。

(42-2) [ϕ] [POL [ϕ [EN TU VIDA TU TRABAJA]]]

↓

<1> [ϕ] [POL [+NEG [EN TU VIDA TU TRABAJA]]]

↓

<2> [HA SIDO LA COSA] [POL [+NEG [EN TU VIDA TU TRABAJA]]]

↓

<3> [HA SIDO LA COSA] [POS [+NEG [EN TU VIDA TU TRABAJA]]]

(41-2) の真のプロトタイプ命題は＋αのかかった (42-2) の<1>の段階と考えて差し支えない。では、何故 (41-2) にのみ [+NEG] がかかるのか。どちらもENを伴う前置詞句を主題化しているので、主題化による動機付けは不可能である。本稿での今までの主張から、(41-2) の発話がされた場合に [+NEG] の素性がかかるのは (41-2) における『En tu vida』に加えて後に来る文章全体が＋αのコンテクスト、即ち [+NEG] を引き起こすからである。『En tu vida』それ自体がある種の副詞句として、あるいは単独で引き起こすわけではない。

(41-1) において [+NEG] がかからないのは、『mucho』という副詞によって生じた表現『En tu vida has trabajado mucho』それ自体がコンテクスト的に中立的であるため、[+NEG] のコンテクストがかかる余地がない。結果としてプロトタイプ命題は中立的であり、その極性はPOLに依存する。即ち、『has trabajado mucho』と発話した瞬間に、そのプロトタイプ命題に [+NEG] というコンテクストがかかる余地をなくしてしまうのである。しかし (41-2) は、『En tu vida』が前面に押し出された表現『En tu vida has trabajado』全体によってコンテクスト依存の [+NEG] の素性を持ちうる。＋αのないプロトタイプ命題それ自体は中立的な含意しか持ち得ないため、結局のところ＋αによる否定表現を表しうる。つまり、＋αが極性の一部を成しているため、プロトタイプ命題自体が既に極性の一部を決定している。だが、(41-3) の文を検討する。

(41-3) Has trabajado en tu vida.

(41-3) は肯定的解釈しかない。本稿の方針で検討すると、(41-3) は (42-3) のようなプロトタイプ命題を持つ。

(42-3) [ϕ] [POL [ϕ [TU TRABAJA EN TU VIDA]]]

(42-3) に派生がかかり、以下のような意味構造を成す。

<1> [HA SIDO LA COSA] [POS [TU TRABAJA EN TU VIDA]]

副詞『mucho』がないにもかかわらず［+NEG］の素性を持たないのは『has trabajado en tu vida』それ自体が中立的であるからである。従って極性の決定は（41-1）と同様POLに委ねられる事になる。

（42-2）と（42-3）の違いは主題化という操作がかかってから否定表現を持ちうるという点ではない。最初のプロトタイプ命題において既に［+NEG］の素性を持っているかどうかという点で決定されている。換言するならば、（41-1）と（41-3）は似たような統語構造こそ持ってはいるが、意味構造は異なりうる。

（42-2）のみに否定極性がつく理由は、前述のとおり主題化では説明できない。よって、以下の仮定を立てて検証する。

仮定①：前置詞ENは時間の経過を指し示す語句と結合し、副詞や数量詞が伴わない動詞が後続した場合（主題化）において否定極性を与えうる。

Bosque y Demonte（1999：671）

しかし、この仮定では（40-1）と（40-2）の曖昧性などが説明できない。そこで、仮定①を棄却し、以下の仮定を立てる。

仮定②：ゲシュタルト知覚された前置詞ENは、プロトタイプ命題の変化により否定素性を潜在的に持ちうる。

これは（42-2）がゲシュタルト知覚され、各々の単語の意味の総和以上の意味、即ち否定極性を与えるのに対し、（42-1）にはそれがない。これは全てプロトタイプ命題の形に起因し、主題化は問題ではない。以下に幾つか例文を挙げる。

肯定の例文

1. ¿Cuántos pájaros has matado *en tu vida,* Justina? (Pedro páramo)
2. Juanito iba penetrando lentamente *en la vida* de la jóven,... (Arroz y Tartana)
3. Otro hecho notable *en la vida* de Galo es el haber repudiado a... (Critica literaria)
4. (En rituales) en la resurrección de la carne y *en la vida* perdurable, amén. (La Gaviota)

否定の例文

1. Has hablado, hablas y tienes de hablar *en tu vida.* (Don Quijote de la Mancha)
2. Ni *en mi vida* le caté a ninguno;
3. Que no los he visto *en mi vida,* como vos los habréis visto,como...
4. Pero si yo le hiciere ni le probare más *en mi vida,* aquí sea mi hora.
5. *En mi vida* le he hablado palabra, y, con todo eso, le quiero...
6. Porque *en mi vida* he visto ni oído cosa más propia.
7. En verdad, señora respondió Sancho, que *en mi vida* he bebido de malicia;

8. Osaré jurar a Vuestra Excelencia que *en mi vida* he subido sobre bestia más reposada ni...
9. Pues ni yo la enamoré ni la desdeñé *en mi vida.*
10. Jamás se podrá ver ni habrá visto *en toda la vida,*aunque no esperaba yo...
11. Pues ándense a eso, y no acabaremos *en toda la vida.*
12. ¡Ah! No lo olvidaré *en mi vida.* (La Gaviota)
13. ¡Dios mío!- decía el hermano Gabriel-, *en mi vida* he visto tantas telarañas.
14. Pero eso de renegar de su padre, *en mi vida* he oído otra.
15. No lo he encontrado ni conocido *en la vida* de Dios. Y se puso a cantar:
16. No me parece sino que ni en el mundo ni *en la vida* de Dios hay de quién echar mano sino de mí.
17. ¿cómo iba a dárselas yo? *En la vida* he aprendido que cuando te condenan a vivir...(La muchacha que pudo ser Emmanuelle)
18. que no os vi *en mi vida.* (La verdad sospechosa)
19. no vi mejor en mi vida.
20. *En mi vida* me ha valido...

以上のようにENを伴う前置詞句はそのプロパティにより（仮定②）否定の解釈をされることが多く、主題化は絶対的な条件ではない。また、感情的な表現や完了時制の際にも否定と解釈されることが多い。

仮定②に従うのならば、以下の文の解釈も可能である。

(43-1) En parte alguna se le puede encontrar.
(43-2) En alguna parte se le puede encontrar.

(44-1) En el mundo se ha visto una criatura más perversa.
(44-2) Se ha visto una criatura más perversa en el mundo.

(43-1) は否定的に解釈され、(43-2) は肯定的解釈になる。(44-1) と (44-2) の関係も同様である。これは、主題化の観点では (43) が、仮定①の観点からは (44) が障壁になるが、仮定②ではこれらの言語現象も説明できる。つまりENにおける否定はENが潜在的に否定極性を持つためプロトタイプ命題に起因し、それに話者の心的態度も含めた＋αのコンテクストが影響する。それを証明するのが以下の文であろう。

(45-1) ¿Hoy mataste el tiempo durante el trabajo?—En absoluto.
(45-2) ¿Hoy mataste el tiempo durante el trabajo?—Absolutamente.

(45-1) は否定的解釈が、(45-2) では肯定的解釈がなされる。その理由は仮説②及びコンテクストはプロトタイプ命題に影響を与えるからである。従って (45-2) は単なる副詞のために肯定的に解釈され、(45-1) はENの潜在的否定極性のため否定的に解釈される。

更に仮説②を支持する言語現象が存在する。

(46-1) No podré trabajar en tres semanas.
(46-2) No podré trabajar dentro de tres semanas.

(46-1) は『三週間以内は働けないが、以後は働ける』と解釈され、(46-2) は『三週間以内は働けるが、以後は働けない』と解釈される。つまり、ENは他の前置詞と違い、否定極性を潜在的に持つため、否定語のスコープに入りやすいのである。

更に以下の例文を検証する。

(47-1) No lo he visto nunca.
(47-2) Nunca lo he visto.

(48-1) No lo hemos podido encontrar en parte alguna.
(48-2) En parte alguna lo hemos podido encontrar.

(47-1) における『nunca』は主題化により、否定の強調がされると同時に否定辞『No』が削除される (47-2)。それと全く同じ操作で (48-1) の『en alguna parte』が (48-2) のように移動し、やはり否定辞が削除されている。つまり、このコンテクストにおける『en parte alguna』はプロトタイプ命題の中に既に否定極性を持っているので、『nunca』といったN-wordと同じ働きをする事が出来る。

これはコンテクストのみに依存した瞬間的なものに過ぎない。よって、(49) が非文になるのは、『en alguna parte』におけるコンテクスト [+POS] とそこから極性によって派生された『No』による [+NEG] が衝突を起こしているからだと考えられる。

(49) *No lo hemos podido encontrar en alguna parte.

以上の議論をまとめるならば、(41) に与えられた例文はどれも、『en tu vida』が極性を与えない。『en tu vida』をも含む全ての文章が発話された瞬間にコンテクストによってプロトタイプ命題に内在的に＋αが与え

られる。そして、プロトタイプ命題におけるコンテクストによる＋αの操作は自律的であるためそのまま保持される。(41-2) において最終的に導き出される解釈は否定表現を持った意味構造でありうる。

(40-1) 及び (40-2) における曖昧性はプロトタイプ命題自体が＋αとして [+NEG] を持ちうるかどうかに依存する。即ち、話し手自身の心的態度に応じて＋αを持つかどうかが容易に変化されうるプロトタイプ命題に根ざされた表現であるので、結局話し手の心的態度に依存する。＋αを持ちうるかどうか決定するのは『発話表現は全て主体性を持つ』という観点からも発話者のみであり、そこに曖昧性が発しうる。

結論として、Bosque (1980：29-64) の提唱する主題化及びNEG-削除といった操作は先に述べた瞬間プロトタイプ命題に一般化する事が出来る。従って、原理により一般性を持たせるという観点からも、本稿の説明のみでENの否定現象を解決する事が出来ると思われる。

7. 結語

以上の考察から、中立命題をプロトタイプと仮定すると、語用論的分業 (the Division of Pragmatic Labor) の弱点が解消されうる。即ち、意味構造の中心にはプロトタイプ命題が存在する。プロトタイプ命題から、テンス、アスペクト、極性、文内モダリティ (S-MOD)、談話モダリティ (D-MOD) がコンテクスト及び連想によって徐々に放射状に派生されていく。そして、言語表現はプロトタイプから逸脱すればするほど有標的となる。このプロトタイプは瞬間的なものであり、したがって、一見有標的な言語表現においても、プロトタイプからの派生が少なければ経済的であり、無標的である。

本稿のプロトタイプ命題理論をまとめると、以下のようになる。

①ある命題、語、句、節、文は中立的命題を持ち、そこから放射状カテゴリーによって派生され意味を構築する。

②放射状カテゴリーの要素はコンテクスト及び連想に依る。

③言語表現における連想は、その命題内容の真理値を変えない範囲でしか行えない。

④コンテクスト依存の＋αそれ自体は意味論的に如何なる影響も受けず、自律的である。

⑤プロトタイプ命題は瞬間的であり、場の状況に応じて変化する。

中右 (1994) では、文内モダリティ (S-MOD) や談話モダリティ (D-MOD) も含め、極性、テンスやアスペクトが段階性を有していると主張する。しかし、本稿では、それらは全て放射状にプロトタイプ命題から派生されている各々のファクターに過ぎず、段階性を有しないと結論づける。それにより、Horn (1984) の語用論的分業 (the Division of Pragmatic Labor) の欠点が解消されうる。

結論として、有標性は二項対立ではなく、放射状に段階性を有している。つまり、本稿ではプロトタイプ命題からよりは制された言語表現が『より有標的』という程度問題の立場を取る。そしてプロトタイプ命題は瞬間的に変化するため、ある同一の言語表現においても、状況によって無標的であったり有標的であったりする可能性がある。今後、この『状況』の厳密な定義及びプロトタイプへの関わり方を模索していくことが課題となろう。

*本稿を作成する上で多くの方から貴重なアドバイスを頂いた。Antonio Ruiz Tinoco先生、加藤泰彦先生、上田博人先生そして鎌田浩二氏に厚く御礼申し上げる次第である。

注

1　『連想』が必要とされる文①及び及びさほど必要とされない文②をそれぞれA、B、C群で比較した。

①She hit the ceiling.

②Anger made his blood boil.

(Lakoff 1987：381)

	A群	B群	C群	全体
①の処理速度（秒（s））	72.1s	28.2s	34.9s	45.1s
②の処理速度（秒（s））	40.8s	17.0s	21.7s	26.5s
②の方が理解しやすいと答えた人	90%	100%	100%	96.7%
①を理解するのに要した時間の倍数（②を1.0とする）	1.7	1.6	1.6	1.7

A群……予備校生20人（平均）

B群……英会話学校の上級生20人（平均）

C群……英語学を専攻する大学生20人（平均）

2　(22-1) と (22-2) の理解度をそれぞれA、B、C群で比較した。

	A群	B群	C群	全体
(22-1) の理解度	0%	70%	40%	36.7%
(22-2) の理解度	0%	95%	85%	60%
(22-2) の方が理解しやすいと答えた人	60%	100%	100%	87%
(22-1) を理解するのに要した時間の倍数（(22-2) を1.0とする）	—	2.8	4.6	3.7

A群……予備校生20人

B群……英会話学校の上級生20人

C群……英語学を専攻する大学生20人

(田林：1998)

参考文献

Alonso, César (1979) *Sintáxis española.* Valladolid: [s.n].

—— (1984) *Gramática funcional del español.* Madrid: Editorial Gredos.

Bosque, Ignacio (1980) *Sobre la negación.* Madrid: CATEDRA.

Bosque, Ignacio and Demonte, Violeta (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española.* 3 vol. Madrid: ESPASA.

Gili Gaya, Samuel (1978) *Curso superior de sintáxis española.* Barcelona: Bibliograf.

Horn, Laurence (1984) *Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature.* Ed. D. Schiffrin. Wasington: Georgetown University Press.

—— (1988) *Morphology, pragmatics, and the un-verb: ESCOL.* New heaven: Yale University.

—— (1989) *A Natural History of Negation.* Chicago: University of Chicago Press.

—— (1991) *The Economy of Double Negation: The Parasession on Negation.* New Heaven: Yale University.

—— (1992) *The Said and the Unsaid: SALT.* New Heaven: Yale University.

—— (1993) *Economy and Redundancy in a Dualistic Model of Natural Language: SKY.* New Heaven: Yale University.

—— (2000) *From if to iff: Condition perfection as pragmatic strengthening: Journal of Pragmatics.* New Heaven: Yale University.

Lakoff, George and Johnson, Mark (1980) *Metaphors We Lived By.* Chicago, London: University of Chicago Press.

Nakau, Minoru 中右 実 (1994) *Ninchiimiron no Genri* 認知意味論の原理. Tokyo: Taishukanshoten 大修館書店.

Paricio, Francisco (1985) *Aspecto de la negación.* Leon: Universidad de Leon.

Tabayashi, Yoichi— 田林 洋一 (1998) 『二つの短文の理解度の比較とその結果の理由について』原稿.

—— (2003) *Aplicación de la Semántica Jerárquica y la Teoría de Prototipo en la Preposición EN -Con Especial Atención a la Polaridad de EN:* Universidad Sofía

Ungerer, Friedrich and Schmid, Hans-Jörg (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics.* London: Longman.

Yamada, Yoshiro, et al. Eds. 山田善郎監修 (1995) *Chukyu Supein Bunpo* 中級スペイン文法. Tokyo: Hakusuisha 白水社.